

同志社の

珍らしい資料

小野 則秋



現在、徳富文庫に収蔵の

(2)ケルムスコット版本 二十一冊

のコレクションは英文学者、書誌学者垂涎の文献で、ウィリアム・ブレイク (William Blake) が心血をそそいで私家版とし刊行した、出版美術の精神として世界的評価を持つ稀観書で、蘇峰翁が在世中購入し、その歿年まで座右に愛蔵して来たもので保存もよく、その印刷、ペラム装まことに綺麗である。しかも二十一冊という大揃いセットは他では滅多に見ることの出来ぬ資料といえよう。更に書誌学上に世界的に稀観の評価を持つ資料を今一点史料室に所蔵している。それは

(3)ギュッラフ訳『約翰福音之伝』一冊である。これは昭和十二年(一九三七)八月アメリカン・ボーズ (American Board of Commissioners for Foreign Missions) から同志社に寄贈されたもので、木版明朝装、本文は白唐紙六十丁、聖書の日本語訳最初の文献としてシンガポールで版行された、聖書翻訳史上忘れてならない資料である。訳者ギュッラフ (Karl Friedrich August Gutzlaff) はドイツ生れの宣教師で、漢名を善徳と称し、十九世紀初頭極東伝道の使命を帯びてバ

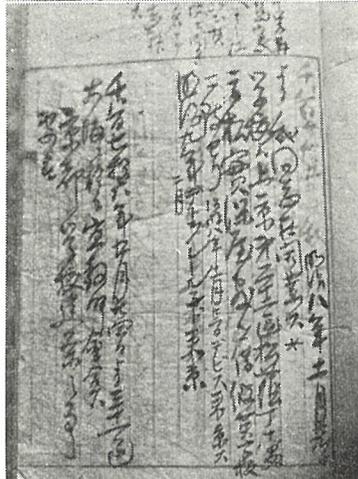
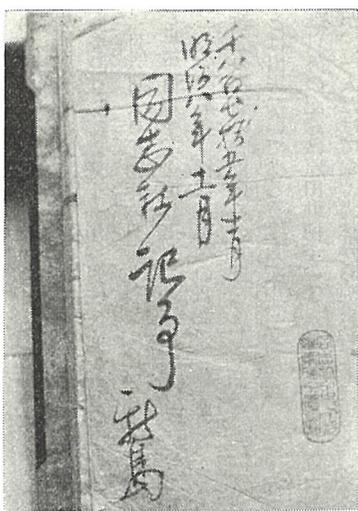
なものが少くない。

同志社九十年の歴史が蓄積して来た関係資料は、昭和三十八年社史々料編集所が発足して以来、創学の当所から現在に至るまで、そのほとんどの資料が史料室に収蔵されているが、この中には新島先生自筆の校務書類、同志社初期の外人教師雇入書類、届書類などを始め、その他土地建物関係の絵図、寄付、購入登記文書の他教職員履歴書、学生々徒学籍簿などの帳簿、記録、文書、写真、先輩の遺墨、書翰など多種多様な資料があり、また一方、新島遺品庫、徳富蘇峰文庫も編集所の所管にあって、諸資料は目下鋭意整理中であるが、現在まで明らかにされた資料の中には、今まであまり知られていなかった貴重、重要

同志社の所蔵として珍らしいものの筆頭におかれる資料は、昭和十七年五月三十日文部省から重要美術品として指定されている(1)紙本墨書靈元天皇宸翰御詩懷紙 一軸であろう。靈元天皇は後水尾天皇の皇子として生れ、寛文三年(一六六三)四月第百十二代の天皇として即位しているが、特に文芸の趣味が深く和歌、漢詩の御製が多く、筆蹟は豊潤和暢の趣ある見事なもので、同志社所蔵の宸翰はその逸品の一つといえよう。これが同志社にどうして伝来したかについては残念ながら明らかでない。もちろんこれは同志社史料ではないが、日本史関係資料としては高く評価されるべきものである。

タビヤに入り、その後澳門を本拠として中国

南部沿海地域の伝道に献身し、一八三五年十二月尾張の漂流民三人が在支英国政府代表機関英国商務庁から、当時ロンドン伝道会に属していたギユツラフに保護を託され、初めて日本語を学ぶ機会を得、その後また一八三七年三月、肥後の漂流民四名がギユツラフの下に託され、その頃漂流民から日本語を学んで『ヨハネ伝』の和訳に着手したものと考えられる。ギユツラフについては重久篤太郎氏の研究が『基督教研究』第十六巻第一号に詳しく、この聖書の贈られた当時は同志社内でも相当話題になっていたが、現在ではすっかり忘れられてしまったか之感がある。



同志社記事の一部

2

聖書といえは新島先生愛用の聖書がある。

蘇峰翁が秘蔵して来たものを寄贈され、現在編集所所管の遺品庫資料として保管されている。新島先生の遺墨、書翰、日記、メモ、遺品の類は細大もらさず遺品庫に収蔵しているが、社史資料として史料室の保管している先生自筆の資料としても貴重なものが多く、その一、二を挙げる

- (4)同志社録事 一冊
これは明治八年（一八七五）八月二十三日同志社英学校設立の許可を得て以来、二十一年（一八八八）五月二十五日に至る校務日誌で、二十年九月二十八日まで新島先生が自

ら記録されており、当時の教職員、生徒等の人事の情報、校舎建築、行事、届、願等仔細に記録され、また掛紙のらん外には細字をもつて先生の補筆、註記があつて、同志社初期の最も重要な史料である。同じく新島先生自筆の校務記事に今一点

- (5)同志社記事 明治八年十一月二十日 一冊

と標記した一冊がある。明治八年十一月二十九日から書き初め、前半は明治十六年（一八八三）二月五日までの校務に関する先生手控の日記と推定されるものである。後半には明治十六年二月より筆を起して翌年九月十一日に至る同志社女学校の重要事項および公会記として明治九年（一八七六）十一月二十六日

の第一公会設立および明治九年十二月三日設立の第二公会の信者の情報が十一年（一八七六）十月まで記され、前述「同志社録事」が公的日記であるのに対し、これは先生の私的な覚書と見られ表紙に「新島」の署名がある。両者とも重要な同志社の根本史料である。

- (6)第二公会録事一冊

これは同志社教会の前身をなす

第二公会の日記で、明治九年十二月三日新島先生が仮教師として新島丸頭の仮偶に第二公会を設立して以来十一年一月までと、十二年六月六日より十四年六月十九日まではいずれも先生自筆で、十七年五月二十八日までの第二公会の集會、役員人事等の日記で、同志社の教会の初期の歴史はこの日記なくして語ることとは出来ないであろう。日記中、新島先生自筆以外の記録は原田助博士の筆と伝えられるが、一人だけでなく書体から見て他にも一、二の人物が考えられ他日勘考の必要がある。

3

次に同志社史料として熊本バンドの裏面史ともいへべき珍しいものに

(9) Kumamoto-On episode in Japan's break from feudalism, by Capt. L. L. Janes.
(原稿五三二枚)

がある。これは全く今まで埋もれていた資料で、筆者キャプテンL・L・ジェンスは説明するまでもなく熊本洋学校教師として熊本バンドのメンバーを育成した人物で、熊本バンドの同志社転学も彼がデヴィス(J. D. Davis)師に紹介依頼によってなされた事は同志社史に明らかなるところである。この資料は熊本バ

ンドの同志社転校以前熊本において洋学校をめぐる封建的保守的市民社会の新旧思想の葛藤のエピソードを描いたもので、筆者はこれを刊行の予定であったと見え、原稿は前半は手書で綺麗に清書され、後半はタイプで印書されている。導言も書かれていて章節もきちんと整理されている。この原稿が如何なる経路で同志社に入ったものであるか伝来は全く不明であるが、想像がゆるされるならば、おそらく熊本バンドの一人であった浮田和民氏あたり、出版するつもりで同志社に持ち込んでいたものが、そのまま残ったのではあるまいか。浮田氏も既に故人となり、その経過を知る由もないが、出版も当時にはまだ文中現存の人物が多く当りさわりもあって上梓がさしひかえられていたものでないかとすることは、うがった推測であろうか。出版または翻訳すれば面白い資料といえる。

ちなみに熊本バンドの重要資料である。

(7) 奉教趣意 一冊

は同志社人によく知られているところであるが、その原本は編集所に所管している。

特に前記「Kumamoto」はひとり熊本バンド資料としてだけでなく、ジェンスの著作物

としても唯一の資料といえよう。

4

次に方面を変えて学生活動の分野における資料を紹介すると、文芸面では桂園派の歌人池袋清風を中心とした短歌運動の情報を明らかにする

(8) 池袋清風日記 明治十七年 一冊

(9) 同 明治二十八年 一冊

(10) 同 和歌添削並評 三冊

等はいずれも清風の自筆で、同志社の諸先輩の名前が諸所にあらわれている。

(11) 興風会日誌 一冊

興風会というのは現在の学生雄弁会の前身ともいえるもので、明治十九年(一八八六)一月二十三日組織されてから明治二十一年(一八八八)十二月二十七日に至る日誌で二十年十月以降学友会と改め、定例的に演説会を開催し、題目、弁士名等詳細に記しているが、徳富芦花が幹事として日記を記しているところもあり、当時の学生達の志向したところが演題を一覧しただけでも明確にされ、メンバー中に柏木義田、井上善吉、小野房吉、徳富健二郎、中瀬古六郎、人見牧太、坂田貞之介、津田鍛雄、畠山市松等の名が頻繁と見

え熱心なメンバーであったことが知られる。

5

学生の思想運動関係資料として極めて珍らしい文献を史料室に所蔵している。これは同志社学生と限ったものではないが、大正十四、五年京都に起った学生の思想事件資料⑬第一次京都学生思想事件調査 二十三冊
昭和五年二月から五月の間、治安維持法違反に問われて検挙された学生の

⑭京都第二次学生思想事件学生手記 三冊

がある。これらの資料はこの事件を担当した京都地方裁判所検事局思想課が、極秘文書として謄写印刷で作成し、関係学校学生課に思想取締の参考資料として頒布したもので、当時検挙された学生の中に同志社学生も相当数見えており、思想運動に入った動機、環境、思想的影響、行動、読書、研究活動、そのグループの氏名等、各人ごとに書かせた手記や口述調査等を印刷した大部の資料で、現在においては社史編集所史料室に完全に残っており、その他は、戦時中官憲によって焼き棄てられて、おそらくはこの大学にも残っていない唯一無二の資料でないかと思われ、学生運動史の研究には不可欠の根本資料というべく、

幸にして同志社に残されている事は、今後、学生思想史研究に大きく貢献するものと思われ。同志社関係学生としてまだ現存の人々がいることでもあり、ここにその個々の名を挙げることは遠慮するとして、対象になった学校は京大、三高、同志社、府立医大等で、第二次事件の資料は三冊のうちその第一冊が京大、第二冊が三高、第三冊が京都府立大学、同志社の二校が一つにまとめられている。

6

その他史料として遺墨、書翰の類においては新島先生のを始め、同志社諸先輩のものは一々枚挙に暇はないほどである。同志社関係外の資料としては徳富文庫に収蔵する明治、大正時代内外の有名政治家、文学者、思想家等の書翰は珍らしい資料で、その主なるものを拾いあげても

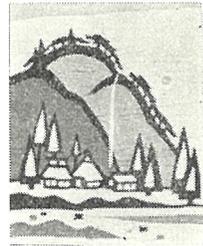
- ⑭井上世外外数氏名士書簡 一卷
- ⑮尾崎行雄・小池靖一其他書簡 一卷
- ⑯田中光顕書簡 一卷
- ⑰田中卯吉・島田三郎・矢野文雄書簡 一卷
- ⑱二葉亭四迷書簡 一卷
- ⑲落合直文書簡 一卷
- ⑳森林太郎書簡 一卷

- ㉑中江兆民書簡 一卷
- ㉒兆民稿 一卷
- ㉓朝日比奈知泉書簡 一卷
- ㉔はか多数あり、また中国、朝鮮関係では
- ㉕羅振玉書簡 一卷
- ㉖梁啟超書簡 一卷
- ㉗李峻鎔書簡 一卷
- ㉘金允植書簡 一卷
- ㉙趙重応書簡 一卷

等いづれも徳富蘇峰宛を発信者別に表装したもので他にもいろいろあるが、すべて一般にはあまり知られていないもので、近代史研究資料として重要なものばかりといえよう。総じて社史編集所所管の資料はまだ充分整理が出来ていないため、研究に利用できるまでの段階に至っていないが、整理が進むにしたがって、ひとり同志社史料としてのみでなく一般的なにも重要な資料が今後も発掘されるものと考えられる。現有資料の他今後も社史関係資料は出来るだけ広汎に収集して史料室の充実を目標に今資料の整理に力を注いでいる。今後発見の珍らしい資料についてはまた改めて発表の機会もあろうし、更に解題目録の編刊も構想している。
(社史史料編集所主任)

美濃の農村から

小暮光司



東海道本線岐阜駅から岐阜県を、すなわち美濃と飛騨の二つの国を縦断して北国富山に至る高山線というローカル線がある。木曽川飛騨川、益田川とどこまでも美しい渓谷にそった鉄道である。最近では随分ジーゼルカーが増えたが、まだ時々黒い煙を吐いて汽車が走る。暖い春の日の午後、客車との混合列車が、バイクよりも遅くゴトゴトと走る時、完成したばかりの国道四十一号線に車をとめて子供にわざわざ汽車を見物させている風景が見受けられる。

私はこの鉄道にそって点在する村々町々の小さな教会を四つ受けてもって伝道している牧師である。その範囲は東西五十キロを越えており、美濃の伝道という言葉がそのまま自然にあてはまるような気がする。

私はこの鉄道にそって走る。濃飛平野の北

端に属する美濃の田園にオートバイを走らせ山あいに分け入り、谷川にそって走る。時には六十キロも離れた岐阜市の県立図書館に現われて一日机に向っていることもあり、昼下り牛舎のそばで青年たちと話し合い、夜には田舎町の喫茶店で他の青年としゃべっているという具合である。あちらの家で泊ったり、こちらの家で泊ったり、時々深夜国道を飛ばして帰ることもある。谷川のせせらぎを聞きながら、納屋にベニヤを張って風を防いだ書斎に一日こもることもある。これが私の生活である。

*

坂祝教会―農村教会である。広々とした高台のいも畠のまん中に、村役場とも山の分教場ともつかぬ大きな建物が一つぼつんとたっている。最近すぐ隣に役員の家が建った。こ

の大きな、そしてかなり荒れ果てていた建物に、結婚して三日目の妻と病身の母を伴って赴任したのはもう七年前になる。事実上の初陣であるこの任地に立って、私たちは感動していた。「しっかりやろうな」二人で手を握り合って同音に語り、後は声もなかった。

ここは戦後、すぐれた伝道者であった工牧師がいわゆる農民福音学校と呼ぶ啓蒙的な伝道活動を華々しく展開し、相当な戦果を上げたところである。この地方の伝道の事実上の拠点であったが、時代の激変、信徒の転出、その他、二、三の困難な問題のため急速に力を失い、伸び悩んでいる。

美濃太田伝道所―人口三万の美濃加茂市の中心街にある。会堂はなく、Y医院の一室を借りて集会をしている。院長Y老人は無教会主義の集会で信仰を得た元軍医で、烈しい気性の明治人である。教会と言っても事実上この一族の家庭集會に過ぎなかったが、最近漸く教会らしい体裁を整えて来た。この町には他教派の古い教会もあって急速な教会形成は困難であるが、長い間にはここに教会が出来るであろう。戦略的にも交通の要地であり中濃（中部美濃）のセンター、かつ岐阜、名

古屋の通勤地帯にも入るこの町にこそ、強い教会が建てられねばならない。

蘇原教会―山村の教会である。幾つもトンネルを抜けて白川口の駅に降りた時の印象は忘れられない。発車を告げる汽笛の音が周りの山々に反響していくもいくつも帰って来るのである。やがて汽車が向うの山かげに消えると線路を渡って外に出、バスに乗る。谷川にそって山あいに入り二十分、山の中腹に教会がある。

この教会は早くから保育園を開設、地域に奉仕している。さまざまなワークキャンプやキャラバンが次々に訪れてよい働きをしている。園長のK老は町の教育委員長をはじめ、多くの役職をもつ良心的な実力者であり、その社会的信望は非常に高い。もう一人の実直な長老S氏とこの二人の囲りに二十代の村のエリートたちが集っている。よい教会であるが、山村のことで人口の激減地である。村の青年団、消防団さえもが次第に結成が困難になりつつあるのが実状である。私は事情があつて昨年からの地に移っている。

各務原伝道所―岐阜市に隣接する新興住宅地の教会で信徒の家庭を集会所としている。

超教派の信徒たちによって自発的にはじめられていた集会所を、三年程前請われて引き受けた教会である。地の利を得、かつ、明朗で献身的な数名の信徒を中核としているこの教会は、着々と教勢を上昇させている。

農村でさまざまな困難な条件に囲まれて孤立し、ただ無から有を呼び出し得る神にのみ信頼を置いて、とにかくも持ちこたえているといった状態の平凡な若い伝道者は、やがてその信仰さえもが次第に抽象化し、スランプトに陥って敗北してしまうという例が決して少くない。私にとつて、この教会を受けもつたことは一つの救いであり、これによつて息を吹きかえし、態勢を建て直す余裕ときっかけを与えられている。

*

農村伝道に関する諸問題は、右の四教会の点描のうちに既にあらわれている所であるが二、三の問題を指摘し、報告しておきたい。

農村伝道ということを観念的に考える場合先ず農民の中に入り、生活を共にし、と考えることは、まず誰もが考える一般的な考えであろうと思う。私たちがはじめはそう考えていた。京都で生れ、京都で育つた妻が耕すと

いうよりは穴を堀るといふかっこうで畝がらんばつていた様子は一つの風景であつたし、私も農家へ出かけて行つて働いた。その間に時代は、驚くばかりのテンポで進展して行つた。私たちのはじめの努力がすべて無駄であつたとは思わない。しかし、それはあまり豊かな実りをもたらすものではなかつた。今は素人のセンチメンタリズムとしていささか、にがい思いで過ぎ去つた数年をかえり見ている。必要な事は、率直な、そして精力的な対話、続いて精力的な研究であつた。

戦前から戦後にかけて、教会は農民福音学校という戦術をもつていた。これは冬の農閑期に農業技術、生活改善、一般教養等の講義と共に、福音によつて封建的な人間関係から農民を解放させようとする啓蒙的な講習会であつた。しかし今や経済の高度成長の影響下に、農民はそれぞれ酪農、養鶏、養豚などに關する高度な専門技術者である。それぞれの組合や飼料会社等の行う講習会の中に教会が介入する余地はない。今教会は、ただひたすら福音を語るることによつてのみ宣教の使命を果さなければならない状況に置かれている。

農村から都会への人口の流出は地すべりの

移動といわれる。長男さえもが、村に残らない。農村問題といえば二、三男問題であった時代とはまさに今昔の感がある。

総じて、農村地方に急速に独立教会を形成しようとすることは極めて困難だといえる。

このような状況で牧師が農村に踏みとどまろうとする場合、三つの方法が考えられる。

一、齒を喰いしはって貧困に耐えて行く。

二、他に生活の手段を見出して行く。

三、数箇の教会を兼牧する。

一について一牧師が貧乏であることはよいことである。しかし、ある限度を越えた貧困は現代においてどういふ意味をもち、どういふ作用をするであろうか。

二、生活費の大部分が他の何らかの仕事で得られて行く場合、牧師は質的に牧師であることをやめて行くであろう。学問においても実践においても蓄積の少ない若い若い牧師である場合、問題は致命的である。

三の場合、諸教会を守るという守勢に傾き易く、積極的攻撃的な伝道態勢をとり難い。

実は、方法がこの三つしかないということが既に一つの問題なのである。教会の古典的な信仰告白に明らかなごとく、キリストの教

会が真に一つなる公同の教会であるならば、僻地の教会に遣わされている牧師にも全教団からそこに遣わされているという保証が、精神的にも経済的にもなされていなければならぬ。それがほとんど出来ないのが教団の現状である。

この問題については既に各方面からしばしば指摘されて来ており、問題を克服するための努力もはじめられている。しかし、日本基督教団が公同の教会としての連帯性を具体的に確立する日の来るのは何十年後のことか見当もつかないのが実状である。

同志社の教会的地盤である旧組合教会においては、各個教会主義が一つの伝統になっている。伝統というものは新しい時代に繰り返し新しく生かされて行くものでなければならぬと思うが、この各個教会主義の立場からは、農村伝道ということが、神学的に実践的にどのように考えられるのであろうか。また総じて現代の歴史的状况の中で、各個教会主義というものの積極的意義は何であらうか。

*

私が同志社に負うところのものは極めて多いと思われる。特に自己の存在を賭けて確認

したもの以外に自己形成の手段を知らない性質は、自由と自主をその建学の精神とする同志社から与えられたものと思い、感謝している。しかし、学校を離れて十年、遠い田舎から私は次のような感想を抱いて同志社を見てゐる。

同志社は世俗的にはまさに私学の雄、関西の名門として、堂々たる実力と体裁とを備えている。新島の名は建学の精神として、ともかくも声高に叫ばれている。しかし、同志社においてキリストの名は果して力を得ているであろうか。早稲田事件で顕在化しているように、私学に問題は満ちているが、もし同志社においてキリストの名が力を失っているという状況があるならば、その状況で問題を克服する望みはない。

この観点からは神学部の使命が大きい。神学部が同志社神学部の伝統に直接的、形式的に固執するのではなく、歴史の中でのキリストへの服従の姿勢をきびしくすることにによって神学部自らが革新されて行くならば、そここそ同志社の、真実の望みが開かれる筈である。

(昭二九大神卒・蘇原教会牧師)



カラヤンと

ベルリン・フィル

貞方敏郎

昨年の初夏の頃、私はベルリンに約二週間滞在し、夜になるとフィルハーモニーに通って本場のベルリン・フィルの演奏を聴いていた。場所が宿舎から近かったのと、それに切符が日本貨にして二百円から最高千二百円というのも魅力であった。会場は、広いティアガルテンを東につきぬけた所、東西ベルリンを分かち壁の真近かに戦後建られ三千人を容れるというバカでかい建物である。いくつものトンガリのある屋根をした黄色の奇妙な形で、「カラヤンのサーカス小屋」の愛称で西ベルリン市民のご自慢の一つとなっている。ただし現在カラヤンが去ったあと常任指揮者はなく、客員指揮者が世界各地から来演しており、ヨッフム、バルビローリ、ジョージ・セルらの名指揮をとりませて楽しむことができたのは幸運だったかもしれない。指揮者が変わっても、この優れたオーケストラの管と絃の見事なバランスで、どこまで出

るのか想像もつかないフォルテの効きようには聴いていて空恐ろしさすら覚えるほどであった。ストックホルム、ヘルシンキ、ベルゲン、コペンハーゲンなど北欧の有名交響楽団——それらは私の聴いた印象では日本のN響と大差はない——とは比較にならない強烈な印象を与えるものだった。曲目にはシュトラウスのティル・オイレンシュピーゲル、ベートーベンの交響曲三、七番、ピアノ協奏曲三番などがあり、それにブルックナーの交響曲を三夜も聴かされるなど、お国ものを誇るドイツ人の気質がよく分るようだ。

帰国して間もなくベルリン・フィルの来日演奏があり、カラヤンとは自国日本で対面、テレビで連日その演奏指揮ぶりを拜見するという奇妙な結果になった。そしてベルリンで見た幾人かの指揮者とカラヤンとの間に見られる違いというものを、ここ日本で改めて感じとった

次第である。

*

オーケストラを前に指揮台に立った指揮者は何をするか。これは指揮者という専門の職業ができた頃から論議されてきたことである。指揮者が単に合奏の統卒者としてメトロノーム的な存在であってはならぬとは常に言われることである。では指揮者の役目は何かといえば、自分のオーケストラに、如何に立派に忠実に、原作者の意図を語らせ、その結果如何に深い感銘を聴手に与えるか



リハーサル中のカラヤン

にあると言われる。ただこの際に指揮者にとって（またオーケストラ自体にとっても）、楽譜という甚だ不完全な写音記号を唯一の手がかりとして原意図を再現せねばならないというきわめて大きな困難がある。こうした苦悶の象徴ともいえるべきものが楽曲に対するさまざまな演奏解釈となって現われてくる訳である。オーケストラという複雑きわまりない楽器の演奏の場合、これは実にたいへんなことである。この困難な仕事を遂行するため絶対に必要なのは優れた指揮者と、同等に優れたオーケストラとの完全に息の合った「共演」である。そして真の共演では、共演者が対等の立場で協力し、お互いに相手の技量を信頼し個性を尊重し合うのでなければならぬ。指揮者によって個性づけられるオーケストラは多い。だが指揮者からも侵されざる個性を持つオーケストラはそれ程多いものではない。こうした数少ない実例を私はカラヤンとベルリン・フィルの演奏に見ることができると思っている。

*

カラヤンの指揮するベルリン・フィルの演奏を見ていると、少し注意深い者なら、彼の指揮のアクションが常にオーケストラより半拍ないし一拍ちかく早く動き、オーケストラはいつもそれを追うように少しずつおくれで演奏を続けていることに気づくであろう。テレビでこの

演奏を見て、慣れぬ人はそれが現場放送または現場録画であることを忘れて、あれはアフ・レコが巧いかずらに、映像と音がズレているのだと思こんでいる人もあるという。そういう人は本場の演奏を見たら必ず奇異な感に打たれるに違いない。ベルリン・フィルが第一回目に来日した時のお目見え第一曲はワグナーのマイスタール・シンガー前奏曲であった。オーケストラ演奏の技術では、この曲の開始にあるような、最強音の「齊奏」の出だしほどむつかしいものはないといわれるが、この時のカラヤンの演奏は実に印象的であった。彼の右手の指揮棒と左手の拳とが渾身の力をこめて大上段から何の予備動作もなしにうち下される。所がその瞬間にはオーケストラ席は寂として音を発しない。が、その両手もとの位置に戻って彼の頭上でうちふるえている時、全楽員は寸分の狂いもなく実に正確に割れんばかりのテュッティを爆発させる。こうして曲が始まり、ストリンジェンドーになると彼の動作が次第に大きく速くなるとそれを追うように少しくれてオーケストラの音も強まり速くなってくる。リタルダンドーではその逆の現象が起る。この現象は、例えばベートーベンの第五の出だしのように、小節の頭が半拍欠けている曲ではどんな素人が見ても気のつくまことに奇妙なものである。あのような指揮でよく全員が間違ひもなく合奏ができるものと思うであらう。まさにこれは神技に近いもので、ベルリン・フ

イルのような優秀楽団にしてはじめてやれることであらう。そこでは日頃のリハーサルで自分の楽団の能力の極限まで知り尽した指揮者は、演奏の途上の節々に暗示を与えるだけで十分なのである。あとはすでに完成した一人前の芸術家である演奏者に存分に歌わせればよいのである。

*

三十年以上も昔、日本の本格的オーケストラの草分けであった新交響楽団の指揮者だった近衛秀麿氏がその留学記の中でこのことを書いていたが、その後実際にドイツからこの型の指揮をもち帰って自分のオーケストラでこれを試みていたことがあった。当時私たちはその真意を知らず、これがドイツの新しい一つの型であると思ひ、ただ好奇の目で見ていたが、間なしにこの指揮法は中止されたのを覚えている。その当時の日本のオーケストラはまだまだこの型を用いる水準には達していなかったのである。また昨年私がベルリンで聴いた折にも、客員指揮者の誰からも、期待していたこの型の指揮を示されなかった。カラヤンとベルリン・フィルが名コンビといわれる意味はこんな所に見られるのではないだろうか。少くとも私にとってこよない感銘を与えるのは、この型の指揮を通じて感得される両者の名共演なのである。——一九六六年六月

(文学部教授・英語学)



サルトルとノーベル賞

矢内原伊作

ジャン・ポール・サルトルは、シモーヌ・ド・ボーヴォワールとともに、日本に来て一ヵ月間滞在した。東京で二度、京都で一度の講演は聴衆に大きな感銘を与え、それを報道した新聞・雑誌の読者にも大きな感銘を与えた。この感銘は知識人が背負っている矛盾、また文学と政治の矛盾を明らかにするとともに、その矛盾を回避することなく担当誠実さの与える感銘だといえよう。この点を理解するために、ことはいささか旧聞に属するが、先年ノーベル文学賞が与えられた際、サルトルが何故それを辞退したか、その理由を検討してみたい。サルトルは何故ノーベル賞を受けることを拒んだのだろうか。この理由には、わかつたようである。よくわからない点、どこかしら曖昧な点がある。そしてこの曖昧さのなかに、この問題の本質、またサルトルの思想の特徴がよくあらわれており、現代の文学者のあり方についてわれわれに考えさせる問題があるように思われる。

サルトルの受賞拒否の理由については、種々の臆測がなされた。イギリスの「タイムズ」紙は、「名譽の賞が与えられることは、作家がその最良の作品を書いてしまったこと、そして反逆が静かな卓越にとつてかわられることを意味する。だからサルトルは完成した老大家と見られることを拒んだのだ」と解釈した。わが国のある文芸誌には「サルトルはノーベル賞を拒むことよつて自分の名前を売ろうとしたのだ」という意見があらわれた。いちばんよくきかれたのは、ノーベル賞はブルジョワ的なものであり、だからサルトルがこれを拒否するのは当然だ、といった意見である。しかしこれは必ずしもあたっていない。サルトルはスウェーデンの新聞記者に対して受賞辞退の理由を發表したが、そのさい彼は、辞退の理由はスウェーデン・アカデミーともノーベル賞そのものとも何ら関係がないということを特にことわっている。ブルジョワ的であろうとなかろうと、いかなる賞ももらわない、と彼は言っているの

である。

サルトルは受賞辞退の理由を、個人的理由と客観的理由の二つにわけて説明した。個人的理由というのは、作家がその社会的、政治的、文学的立場を表明するのは、ただ作家に固有な手段、すなわち著作のみによるべきである、という著述家としての信念である。「作家が受ける一切の名誉は、私にとって好ましくない圧力を読者に加えることになる。単にジャン・ポール・サルトルと署名するのと、ノーベル賞受賞者ジャン・ポール・サルトルと署名するのでは同じことではない」と彼は言う。つまり彼は、榮譽に飾られた者としてではなく、無位無冠の自由な人間として、いかなる制度にも縛られないただのサルトルとして、読者の前にあらわれたいのである。われわれはここに、著作そのものに全生命をかける文学者の覚悟といったものを感じとることができるだろう。彼が友人に語ったと伝えられる「じゃがいも一籠だろうがノーベル賞だろうが、賞というものは一切ごめんだ」という言葉は、このことをはっきり言い切っている点で気持ちがよい。

辞退の理由がこの個人的理由だけであるならば、サルトルの態度はまことにすっきりしているが、この上にさらに客観的理由が加わるので話が複雑になってくる。理由は一つあればたくさんなので、二つの理由があると、それらはたがいに弱めあう働きをするだろう。

辞退の客観的理由は、東西文化の平和共存のためのたかいは、人間相互のあいだ、文化相互のあいだでおこなわれるべきであって、社会体制やそれと結びついた公共団体がそこに介入すべきではない、ということである。文学者は文学活動を通じてのみ東西文化を一つに結びつけるためのたたかいに参加し得るだろう。だからサルトルは、自分は社会主義に共鳴しているが、たとえレーニン賞をくれると言われても受けることはできないだろう、と言うのである。

ノーベル賞は、それ自体においては、ブルジョワの性格のものではない。しかし現在の状況内では、それは客観的に、東側ではなく、西側の文学賞の役割を演じる。これはスウェーデン・アカデミーの会員の善意の及ばない事柄である。アルジェリア戦争に際して、サルトルは非法的な抗戦平和運動に加担し、いわゆる「百二十一人宣言」に署名した。「その頃であつたならば、私はノーベル賞をありがたく受けたかもしれない」とサルトルは言う。「なぜならそれは私にだけ名誉を与えるのではなく、われわれが戦いとうとうとしていた自由に名誉を与えるものだっただろうからである」ノーベル賞そのものはブルジョワ的ではないにしても、現在では客観的にはそれはブルジョワ的に受けとられる危険が多い。そこでサルトルは、ノーベル賞をもらうよりは辞退するほうが安全だと判断するのである。

こういった客観的理由があげられていることから、さき



人文書院写真部 撮影

に述べた個人的理由が絶対的なものではないことが知られる。作家は文学作品のみにおいて勝負すべきであって、したがっていかなる賞も受けるべきではない、という命題を形式的に固定すれば、これまでにノーベル賞を受けた文学者はいずれもまちがっていたということになるだろうし、アルジェリア戦争当時ならば賞を受けたであろうということも言えない筈だろう。

客観的理由についてもそれが絶対的でないのは同様であって、アルジェリア戦争当時ならば受けたであろうというのであれば、自由と平和のための戦いが今日もつづけられて

いる以上、今日でも賞を受けても差し支えないではないか、という理屈がなりたつ。なぜなら、ノーベル賞は「百二十一人宣言」に署名したことをも含めて、これまでのサルトルの全活動に対して与えられたものであり、現に自分は社会主義の味方だと言っているサルトルに与えられたものだからである。

したがって、サルトルのあげている辞退の理由はいずれも絶対的なものではない。ただ明らかなことは、それらの理由は寄り集まって一つの強固な理由となり、現状では、どうしてもノーベル賞を受けることができない、という態度を生み出したということである。

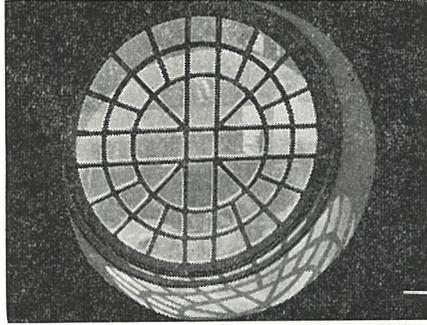
そしてこの二つの理由の矛盾のなかに、サルトルの思想そのものの矛盾があらわれているのではなからうか。一切の制約から「自由」な文学の立場に立ちながら、現実には社会主義的「自由」のために戦うという矛盾である。そしてこの矛盾こそサルトルの活動の源泉であり、またその価値であらう。

辞退理由の説明のなかでサルトルは率直に賞金の問題に触れているが、この問題において右の矛盾は端的にあらわれる。賞にともなう莫大な賞金を社会主義運動のために有効に用いることができるではないか、ということがサルトルを悩ませたらしい。だが彼は「制度には縛られぬ」という態度を貫くことによって筋を通したのである。

(文学部教授・欧州文学)

「同志社のやり方」

中村久美子



その頃、私は他の大学を卒業し、あるオフィスにつとめていた。私は毎日もっと社会福祉について学びたいと切実に考えていた。

当時、大学院で社会福祉を専攻できるのは、同志社のみであった。私は願書の締切りぎりぎりまで、動物園の熊のようにオフィスの中を歩いた。私の人生の転向点は、正にあの願書の締切日であり、あのオフィスであったと思ふ。今でもオフィスの床板の四角な罫目ははっきりと目に浮ぶ。

大学院の生活は物珍らしいものばかりであった。同志社の自由でソフトな味は、何かソーダ水を飲んだ夏のさわやかさを感じた。先

生方が親切で丁寧に思えた。同志社については、キリスト教系の学校という位にしか考えていなかったし、新島先生の教訓がどんなものか全然知らなかった。しかし、それぞれが個性を尊重し、自由であることは好ましかった。このように感じたことは、それまで私が何か型にはまった固い学風の下で教育されてきたからかも知れない。女子学生の服装等をもとても華美で自由さを感じた。それでいて、貧乏学生の部類に属していた私に何の抵抗感も与えなかった。全く各自それぞれなのである。私が学部時代を過した大学でも制服は定められていなかった。しかし、誰が決定するのでもなく、黒のスーツに限定され、それが制服のような錯覚におちいっていたものである。そんな雰囲気とは全く対照的であった。

大学院生活のなかで、社会福祉学科の創設者の一人であられた今は亡き竹中勝男先生に接しられたことも忘れられない印象である。

現在の大学は、種々の批判をうけながらもいわゆる象牙の塔というムードを残存させている。そのなかで、竹中先生は参院議員をなさりながら、教鞭をとられた。国会を見学させて頂いたことも思い出であるが、このよう

私は、よく人になぜ社会福祉をえらび、産業カウンセラーになったのか、と尋ねられる。私は、その時々に応じた返答をしながら、いつでも一つの場面を思いおこすのである。

な両立が成立したことは稀少価値のあるものであるといえよう。竹中先生のこのようなさり方については、諸々の批判もあることと思われるが、社会に出た今日、私にとって多くの示唆と意味を与えているものである。

更に、私にとって大きな影響を与えたものは、プロフェシヨナル・コースとして設けられたフィールド・ワーク (Field Work) である。今まで勉強とは机の上で、という型を身につけてきた私にとって本当にびっくりする体験であった。このクラスでは、実社会で社会福祉事業に日夜取組んでおられる人たちと学生とが入りまじっていた。第一章〇〇〇というレクチュアはなく、ほとんど指名され、面接記録を読まれ、実習させられた。理屈をいうのではなく、何を今どうするのか……という先生の質問が矢つぎ早やに飛び出し、あとで理論の整理がなされた。私はまごまごしているうちに最劣等生になってしまった。

学部時代アルバイト学生として自負していた私は授業をサポートことに抵抗感をもたなくなっていた。しかし、このクラスでは、理由の如何を問わず欠席したり遅刻することを禁じられた。ドロシー・デッソウ先生 (Miss

Droshy Dessau) はアメリカ人だから日本の現状を知らぬと私は真底腹を立てた。

いま社会に出て社会福祉事業の一端を担っている私は、この訓練にいかほど授業料を払っても多すぎないと思っている。そして、この自由な学園の空気のなかに、このユニークなフィールド・ワークを設置された諸先生方の先見を痛感せざるを得ない。在学中はブリブリいっていた自分の底の浅さを恥しく思っているのである。

私はこのような訓練と教育の恩恵を得て、昭和三十五年に卒業し、以来産業カウンセラーとして働いている。

2

この産業カウンセリングという仕事は、ケース・ワーク (Social Case Work) の一分野として、戦後急速に波及してきたものである。実際の仕事についてみて驚いたことは、この分野に大変な偏りがみられることであった。それはカウンセリングという分野が、ある種の心理学プロパーの専有するところになっていったということであった。カウンセリグとは、一対一の人間関係において成立する人間のふ

れ合いの中に始まり、そこに終るという心理的技術であるといった考え方からきているのかも知れない。だから、そこからは、カウンセリングと社会福祉の結びつきについて考えが及ばないのである。つまり、社会福祉の方法であるケース・ワークという技術が低く評価され、程度の低い事件処理技術といった意味にしか理解されていないのであった。

このような誤った考え方は、厳格なスーパービジョン (Supervision) の下で訓練を受けたことがない結果生れたものである。私は同志社のフィールド・ワークによって、ケース・ワークとカウンセリングを共に学んだと思っている。換言すれば、個人の福祉を共に考え、面接し、問題を環境の側面を含めてとらえてゆく方法を身につけたのである。

この方法を実際に適用する場合、援助してゆく個人をめぐって、多くの人たちとチーム・ワークを組まねばならない。企業を例にとると、いわゆる管理者とか、上司と呼ばれる人たちである。私はこのチーム・ワークという面でも忘れられない体験をした。それは、企業のなかで福祉関係の仕事を受持ったり、或いは、自分の仕事に福祉の考え方を生かそ

うとしている人たちのなかに同志社の先輩・後輩を多く見出すということであった。その方たちは決して社会福祉を専攻した人たちではない。私はこうした人たちによって支えられてカウンセリングの仕事をしてきた。私はしみじみと同志社の学風の影響力の大きさを感ずるのである。私には同志社精神といわれるものがあるとすれば、社会福祉の精神がそれであるように思えるのである。

3

まる六カ年にわたる産業カウンセラーとしての毎日は、ただいかに同志社で受けた訓練と精神を忠実に具体化するかという日々の連続であった。そして現在もそれ以上のことをなし得ない私である。その私が最近感じたことが二つばかりある。一つは、このカウンセリングの分野で、実地のプラクティカルなスーパービジョンが非常に強調されるようになってきたということである。私の仕事に対する評価が、同志社における訓練・教育の評価と常に関連するということである。あの人の仕事は同志社のやり方々というわけである。私はこのことに大変なこわさを感じている。

私の仕事のなかに同志社の訓練は顔を出す。私が学部時代を送った大学はかくれてしまっている。私の仕事のなかに占める同志社の比重を思うたびに頑張ろうと思うのである。

第二には、同志社でのこのような訓練が目されるようになった理由についてである。大学では理論を尊び、実践や実習を軽視するという一般的風潮のなかで、同志社がそれを打破っていったからであると思う。ここに同志社の進歩性を感ずるし、諸先生方が、プロフェショナル・コースとして、ケース・ワーク、及びフィールド・ワークを取り入れられた努力に感謝したいと思う。他大学では、口ではいえても、容易に実現できない考え方の壁があり、せいせい形だけの中味のない制度に終っている分野だけに一層この感を深くするのである。

ただ、最近の傾向は、他大学においても、理論をより深化させるための実践という見地から、同志社型の訓練が重視されつつあるし、ここ数年その準備がなされてきている。

私は幸いにしていまだに同志社で教育をうける機会を与えられている。それでいつ卒業

したのやら判らないような気分であるのだが、ここで思うことは、伝統的に社会福祉の実践教育の先駆者としての同志社が、他の大学の進展状況のなかで、それだけユニークな進歩を示しているのだろうかという点である。

時折目のまわるような忙しい仕事のなかから抜けだし、烏丸今出川までやってくる。とほととする。そこは静かである。私は、その静けさのなかから、何かを持ち帰って仕事の武器にしたいのである。静寂と自由の中には安息がある。しかし、私の欲しいのは、社会福祉の実践に役立つ、更に進んだ指針である。事物の説明ないし解説よりも実践的理論を与えてほしいと思う。これが私を育ててくれた母校に対する唯一の苦言である。

また、他の大学での訓練をみてみると、先生方が有機的なまとまりをみせて、学生の教育にあたられようとしている。先生方が研究者としての側面を重視されるのは当然のことながら、教育者としての側面で、より一層のチーワークを発揮されんことを期待したいと思うのである。

(昭三五大文院卒・松下電器産業カウンセラー)

欧米の大学教育(二)

——ヨーロッパの諸大学——

三輪輝夫

英国型と大陸型

予算の七〇%を国家が負担するが、しかも私学であるオクス・ブリッヂ両大学を擁する英国型と、大学はすべて国立または州立(以下、国立と概称する)であると称しても差支えない大陸型と、欧州の大学は截然と、この二種類に分けて考えることが出来る。アメリカの諸大学を歴訪した際の、各大学のスポークスマンは口をそろえて欧州では全部の大学が国立だ、欧州に私立大学“Private University”はない、と単純に割り切っていた。形骸的には正にその通りである。財政を誰が負担して

いるかという観点のみに立てば、欧州の大学は、すべて“Government Supported”である。しかし教学と経営は誰が実施しているかという観点からすれば問題は自づから異なってくる。たとえばケンブリッジ大学は、自らの性格を説明して“its self-governing, save that the approval of Queen in Council must be obtained for amendments of its statutes”と述べ、ケンブリッジが自治団体であること明らかにしている。オクスフォードも全くこれと軌を一にする。つまり形の上

でも、経営の主体は大学であって政府ではない。政府は財源を補給すれば足るという思想である。しかし大陸に渡ると情勢は一変する。



ハイデルベルグ大学のクラシックな校舎

たとえばハイデルベルグでは「大学は、国のものであるが、しかも国から独立している。

しかし経済は州政府の会計官が行なう。北部の大学では学長も経理に干渉できない実情であるが、わが大学では経常費は学長の下にあり学長に命令権がある。州の文部大臣も発言することはあるが」という説明がなされ、そのあり方はわが国の国立大学に著しく相似して来る。しかも教学と研究は完全に自治を保証されており、教授は何を教えてもよいという思想は普遍的にみとめられている。「それはフンボルトが立案し、フォン・シュタインが法制化した原則にもとづくものだ」というアンネケ事務局長の考え方は、正に明治初期、帝国大学の官制をつくるに当って、明治政府が模倣したドイツの大学制度の基本概念そのままである。

ただベルリン自由大学だけは性格が全くこととなる。この大学はその特殊な設立事情にもとづいて理事会を持つ。従って形態はオクスブリッジ両大学に相似する。経営の主体性は大学にあり、ベルリン州(市)政府との妥協は、理事として州および連邦政府の代表が参加することによって成立している実情である。

大陸型の大学教育

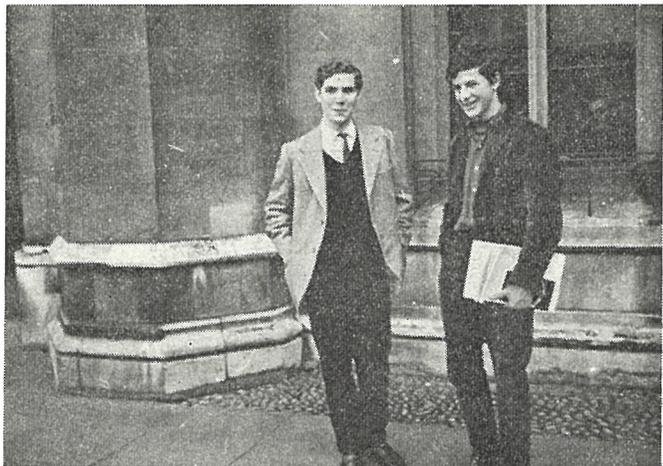
フランスでは二十二の大学区にそれぞれ国立の大学がある。しかし三十六万人の大学生のうち十万人はパリ大学に集中してしまう。バカロレア“Baccalaureat”をとれば、その

全部が大学に入れるこの国では、入学試験が存在しないのでこういう現象が起る。その世界一に古い、世界一に巨大な大学を訪問して前文学部長マトウレ教授から、この大学の学行政についてさまざまな話を聞いたが、パリ大学では学部が強い自主権を持ち、毎年度それぞれの授業計画、収支予算について、学部長が直接文部大臣と折衝する、という他に類例のない運営方法を説明されて驚いた次第である。このことは一面、政府の管理行政が直接学部に及んでいる状態を示すものと理解されないこともない。

右のように欧州の大学は、国立が大半を占め、しかも一あるいは「従って」といってもよい一その数が日本やアメリカに比べて非常に少ない。そのことは大学が大衆性を持たないこと、結果としてエリート教育の機関に近い形になっていることをあらわす。

欧州では、各国の文教政策であるというか国民的性格であるというか、ともかく小、中高等と学校の段階を上るにつれて、生徒は職業教育と進学教育の二つのジャンルに明確に区分され、大学進学者は大学の門を叩くまでに、ほぼ大学の収容力に見合う数に近づくのである。もとより人口の増加と文化、経済の発展は、年々、大学への進学者を増加させている。たとえばハイデルベルグでは一九三〇年の学生数三千人が六四年に一万二千人となっており、英国のロンドン大学(実際は四十一のカレッジの総合体)では二万七千人の正課学生及び同数以上の課外学生を集め、結果としてオクス・ブリッジに入れない人たちを勉強させているという、そんな状況が無いではないが、原則的に欧州大陸では右のような自然淘汰が行なわれているのである。

チュリッヒ大学の学長さんの説明によると、スイスでは小学校六年の終了と同時に、簡単なテストによって高級の普通課程へ行くものと、職業課程へ進むものを分ける、この比率は二五と七五である、とのことであつた。このような現象について、先述したマトウレ教授が面白い説明をした。パリ大学のみで



ケンブリッジ大学の学生と語る

なくフランスの全大学に学ぶ学生はブルジョアの子弟が多く農民や労働者の子弟は少ない。それは経済的な理由のみでなく、社会感情として、親が大学に対して信頼を持たない「Inconsience」からだ。

そこで信頼しないとはどういうことか、と質問に及ぶと、親は知識の高い子供との間に感覚のゆがみが出来ることを恐れるのだ、つまり大学教育がそんな子供たちをつくると考えている。それは大学を信用しないことだ。という三段論法の返事がかえって来た。

とも角、国民感情が少数エリートの進学を是認しているのか、根深い保守的な民族慣習の結実なのか、文教政策の成功であるのか、日本のように大学卒業が出世と結びつかないためなのか、私には未だ判断がつかない。

とまれ本質的にエリート教育である欧州諸大学では、大学教育の評価は「学問の深さ、研究の高さ」におかれるていると観察する。その上に、歴史と伝統が各大学の学風をつくる。よき研究者は、よき教育者であるとの信念は、ひろく欧州各国の代表的な大学に培われている。何といつてもパリ大学、オクスフォード、ケンブリッジ、ハーバード、ハイデルベルグ大学など、その学灯は欧州の文明を導いたのであるから。

英国型の大学教育

英国型の大学として典型的なオックスフォードはケンブリッジと同じくカレッジ・Collegesの集合体であるが故に、大学とカレッジの間における勢力の消長は永い歴史をもつて移り代つていく。しかしオクス、ブリッジともに今日の隆盛を成し遂げたのは、一三〇年（オクス）一一八〇年（ブリッジ）といわれる創始の時代より、世紀を追うて次々と建設され、拡大された「カレッジ」の教育効果に負うところ大であると称して差支えない。現在、両大学の持つカレッジは左の通りである。

オクスフォード 男子カレッジ二十四、女子カレッジ五、カレッジに準ずる組織としてソサエティ三、宗派別ホール五

ケンブリッジ 男子カレッジ十八、女子カレッジ二、カレッジに準ずる設備としてグラデュエイト男子寮二、同共学寮一、外に女子学生のための公認寮二

カレッジが即ち寮であり、かつチュートリアル・ホームであることは案外日本で知られていない。「カレッジ」の存り方を簡単に紹

介するためケンブリッジのカレッジを一つと
り出してご覧に入れる。

◎セント・ジョンズ・カレッジ

“Saint John's College”

一五一年、リッチモンド・エンド・ダー
ビー伯爵夫人、レディー・マーガレットによつ
て創設された。この婦人はヘンリー七世の母
であり、クライスト・カレッジの創立者でも
ある。学生数は六八九名。校長である“Mas-
ter”の下にチューター九名、講師、研究指
導員五十八名を擁する。ここでチューターと
は授業補助者の意味ではなく、教授“profes-
sors”、助教授“Readers”、*4でがチューター
の名称で呼ばれ、その外に、講師“Lecturers”、
指導員“Directors of studies”、がチューター
の指揮下に、またはチューターと共に實際
の授業を担当する。

カレッジは学部ではない。非常にひろい範
囲の科目群を持つ小規模であるが総合的な大
学である。セント・ジョンズの六十七名の教
員は古典や神学、自然科学のある程度の分
野、ヘブライと東洋研究、近代語学、技術
関係学等多方面にわたる専門家であり、カレ
ッジが決して単科大学ではないことを物語

る。ただカレッジによりその卓越する分野
が、大なり小なり異なる実情であることは明
らかに見てとれる。またそれぞれの伝統に従
って、*4またその上にオクスフォードの、或いは
ケンブリッジの総合的な教育理念を加えて、
独特な人格形成が推進されている実情であ
る。そうして両大学とも、その授業方式

の支柱は全寮制を土台とする一対一の徹
底したチュートリアル・システムにおか
れる。オクスフォードのデイスカッション
で、「われわれは三十四年の期間（パチ
エラーを与える年限）だけで、確信をも
つて、英国社会の各方面にわたって、こ
れを指導し得る人物を養成出来る」と、
いわばたいへんな自慢をされたが、決し
てうぬぼれとは言い得ない次第である。
なおオクスフォード大学は複雑、広汎
な学位試験のため“Honor School”と
称する分野別、学位別の総合カリキュラ
ムを編成して各カレッジを指導し、監督
する。

そのため十六の教授組織“Faculties”
を持ち、ユニバーシティー・プロフェッ
サーズがこれを構成する。しかしこれら

のメンバーもまた各カレッジのチューターを
必ず兼務している。ケンブリッジもまた、
これと相似した形態を持つ。

西独の新しい大学

ベルリン自由大学と学生の立場——ベルリ



パリ大学(ソルボンヌ)のキャンパス

ン自由大学 “Frie Universität Berlin” は、ベルリン州立でありながら理事会を持つことはすでに述べた通りだが、この構成は議長を州知事がつとめ、議会、政府、連邦、企業、労働組合の各界代表者及び学長、副学長等の幅広いメンバーに、驚くなかれ学生代表が一人加わっている。学部連合体で、教学の最高機関である “Senate” にも学生が二人正式のメンバーとして参加する。学生の自治組織は大学から独立した法的な団体で、弁護士を顧問とし、寮、食堂、医療、奨学金の斡旋（大部分は国費）等広範な事業を営む。しかも大企業、財団、大学当局から相当大きな補助金を獲得して、経営は順調である。学生村 “Studenten-Dorf” は主としてアメリカの資金をもって建設され、二十の共同宿舎を持つ大きな自治団体である。二十の宿舎から一人宛の議員が選出され議会を構成する。別に総員の選挙で村長が選任される。

こういう思い切つて斬新な形態がどうして誕生したか？ その由来はこの大学の特殊な創立事情を聞いて初めて理解される。第二次大戦末期にベルリンが廢墟と化した時、フンボルト大学も同じく潰滅した。西欧側の三国

（英、仏、米）がその復興について、方針を打ち出さない間に、大学はソ聯によつて、その存在した場所（東ベルリン）において再興された。これに対し、西ベルリンにおいてフンボルト大学の後を継ぐものが欲しいという声が生徒たちの間に一特に東から脱出した人たちを中心に一膨湃として起り、西欧側三国と西ドイツを揺り動かして、ついにベルリン自由大学が生まれたのである。この間学生たちは進んで建設にも協力し、設立を待ちかねて入学した。この大学設立に際しての学生の貢献が、右に述べたような学生の大学行政に対する参加という形で酬いられたのである。なお、大学に対する国家権力の圧力を抑制する意味において、私立大学の実質をそなえたという希望の表現として、国立でありながら理事会を設け、大学に経営の実力を与えたのである。

学生の理事会や大学評議会への協力という現象は、世界的にも稀に見ることであろう。極めて小人数の参加で大勢に影響がないとは言え、大学当局者の説明によると、ザールブリュッケン、ボンなどにもこの方式が試みられている由である。そこで言葉を慎重にして

言えば、「何かトラブルは起らないか」との質問に対し「学生はよく心得ている。そういう心配はない。民主主義の原則からいえば、大学の大部分は学生なのだから、もっと数を増加したい」との答えがかえつて来た。

（大学教務課長）

*1 Queen in Council-King in 英国枢密院。

*2 その思想は、「政府も、議会も、大学人も」また全国民が持つている。

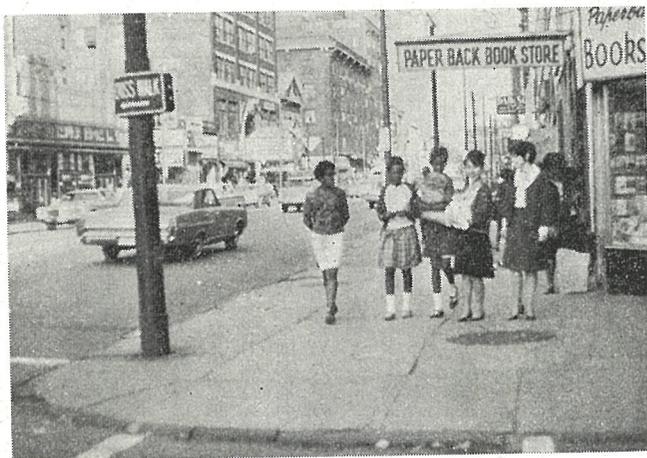
*3 欧州各国がエリート教育を、意識してつくっているという意味ではない。結果として——である。ほんとうのエリート教育はフランスにある。三つのグランゼコールがそれだ。英国のイートン、ハーローもまたその類を免れない。

*4 英国のみならず欧州では大学院の組織はない。大学に入つて最低三年でバチェラーになる。そのあと二三年かかってマスターになる。ドクターをとるのはその後何年かかるか——という考え方である。「学位をとる」ということが主題で、卒業という観念は稀薄である。

*5 アメリカ流の経営方式ともいえる。アメリカではたとえ州立カリフォルニア大学は理事会をもち、州知事が理事長である。

エリー湖畔の四季

鯉江梅乃



クリーヴランド市ユークリッド通り

〃勇氣と勤勉とをたずさえた西方への巡礼者〃といわれているアメリカ人と共に、一介のおかみさんとして、学生として過した一年間余の滞米生活は、その時々に移りゆく広大な自然美で鮮やかに色づけされ、感慨深く思

い出される。

アパート近辺

一九六四年九月、アメリカの病院勤務の夫と共に渡米し、オハイオ州クリーヴランドの

下町はずれに住むことになった。アメリカ屈指のクリーヴランド美術館、クリーヴランドオーケストラの定期演奏が行なわれている音楽堂、ケース、ウェスタンリザーブ各大学、公園等々(ユニバーシティサークル)を控え、市場、郵便局もごく近くにある恵まれた環境だった。アパートの前の草原では、花々の間をリスが行きかい、おしゃべりな小鳥たちで大にぎわい。向う側は大通りで絶えることを知らぬ車の流れ……。そんな対照的な光景がアパートの窓から一望された。ここから歩いて二十分、公園を横切ったちようと美術館の隣りにウェスタンリザーブ大学のクリーヴランド、インストチュウト・オブ・アートがあり、昼間はそのデザイン科に通い、帰り道、晩ごはんの材料を買って戻る毎日だった。

最初、市場に行ったときのこと、いろんなものが一堂にあり、その便利で合理的なすばらしさもさることながら、その一角を見てはつとした。奇妙な野菜が並んでいる。軽く十倍はあろうと思われるなす、きゅうり、ピーマン等々、その横にはめざしくらいの小さなダイコンが遠慮がちにひかえており、おかし

くて仕方なかった。見たこともない野菜、果物もあった。奇しくも珍らしい物を片っぱしから食べてみようとの時決心し、市場へ行って見てまわるのが楽しみの一つになってしまった。おかげで市場のおじさんと仲よくなり、負けてもらったりしたこともある。買物をし、からから手押し車をひっぱっての帰り道、近くに黒人街がある関係上、よく黒人に出会った。黒人といっても墨色から東洋の色黒ぐらいの人まで差も微妙であるが、目鼻立ちが大きく顔に対しての場所すけも大胆、中には迫力があり過ぎ、町角でばったり面と向いあって驚かさされた人があった。行き過ぎてからもドキドキしていた。慣れてからもよくそんなことがあった。白人の中にも予想を越えた人がかなりいた事から考えても、日本人の顔は平和そうな位置すけでなんと無難なのだろうとつくづく感心したりした。

エリー湖まで車で約十分、並木のS字道路を突走っていくとすぐである。行った時は秋であったが、その並木道の紅葉の美しさは格別で、空気が澄んでいるせいもあるう、冴えて冴えて冴え抜いた黄色だった。一方、メトロポリタン公園の木々もその調子でどこまで

もどこまでも延々と黄色が続いており、夕ぐれ時は黄金色に輝き圧巻だった。果てしなく続く大陸の魅力は大いに気に入り、嬉しかった。それから数週間でのこの黄色は規則正しく褐色と化し、枯木となり、灰色の厳しい冬の到来となった。

学生たち

夜中冷え込みの強い時は摂氏零下二十度ぐらいに下ったろうか、ひどく寒いところだった。うっかり窓べりに冷蔵庫代りにとビール瓶を並べておいたら冷凍のビールを作り大失敗、雪は十一月から四月まで見られた。吹雪となると猛烈な渦となって荒れ狂う。一メートル先も見えなくなり、すさまじい。雪女など出てきそうなロマンチックさはなく、ダイナミックな迫力に満ちていた。そんな頃インストチュウトへの二十分の徒歩はいささか苦痛であったが好きなことが勉強出来るうえ、途中の雪景色を眺めて歩く魅力の方が遥かに勝っており、アパートの重いドアをぐいと開け、明るい雪中に踏み出す快さは何ともいえなかった。インストチュウトでは学生たちが全身をぶっつけて勉強していた。黙々と打ち

込んで作品と取組んでいる。学生たちの周りには気迫さえも漂ってみえた。朝九時から四時までだが、朝なら六時から開いている。私も七時半頃行くことがあったがもう先客が必ず数名いた。昼休みの一時間は唯一の憩いの時キャフテリアでワイワイいつて食べたたり歌ったり……実際皆よく食べていた。そんな彼らの食欲にも彼らの血に脈打つ、たくましい開拓精神が充分感じられた。アメリカの大学は授業料が高いため経済的に恵まれない学生はやはりアルバイトで補っていたが、アイルランド系のある学生など昼休みはキャフテリアで血洗い、放課後は掃除夫、休日は向いの美術館で働いていたが、勉強もよくしていた。先生たちも第一線で活躍中の芸術家、熱心な人たちがばかり、手取り足取りで教えられなくとも学生によい影響を与えていたようである。また学生の世話もよく焼き、私もかいかぶられたか、うっかりインストチュウトに残されるところだった。

この卒業式で面白いと思ったことは厳粛な儀式の折に優秀な学生に一、二年は働かないでゆつくり制作出来るお金が渡される事であった。割り切っていてさすが合理的な国だ

と羨ましかった。

冬から春へ

休日雪景色を見に廻った。人一人いない雪中にぽっかり石像が顔を出している墓場はこのほかひきつけられたが、エリー湖の氷上はるか夕日まで冷たいオレンヂ色になって沈むのや、どこまで行っても尽きることはない灰色の林も、つっぱなされた非情な趣きがあった。買物の帰りだったか、雀が五十羽ほど黒くなって道ばたにかたまっていたことがある。そつと近づいてみると雀のいるところは雪がなく湯気が上っている。ちょうどその道路の真下にはスチームの管が通っていて、雀たちは暖をとっていたのである。まるで背をまるめて、いろりにあたっているようなので、ほほえましくつい吹き出してしまった。

春はまだあたりが荒涼として冬なのに雪の下に名もない花が色づき始める感動的な序奏から、百花撩乱の春の饗宴まで一步一步であるが、その後は急ピッチ、新芽が吹き出し始めたかと思うともう一週間後には向う側の景色が新緑で見えかくれ、草木の緑の吐息でむせかえらんばかりとなる。待ちこがれていた

人々はどつと郊外へ。われわれもメトロポリタン公園へ出かけたが、裸になって日光浴している人が多かった。中にはすごいビキニ美人もよく見かけた。ハイティーンの女性のみずみずしい美しさはまさに輝けるビーナス日頃安全運転を誇っている旦那さんもこの時ばかりはあつちにふらり、こつちにふらり、危ないところだった。

アメリカ婦人

パーティに招かれたり招いたり、友達の家で入りびたつて話したりして家庭を観察した限りでは、婦人がとてもよく働いていた。表面はなるほどレディファーストでエレベーターでもドアでも男性が開けて先に入れてくれたり、やさしく手を取って助けてくれたり、にこやかにお世辞をいったり、ひととりの家庭サービスマスもするけれど、本当は亭主関白のようであった。未婚の女性は男性に対して不思議なほどいはっていたが、ミセスはそうでもなかった。主婦たちは朝、夫や子供を送り出した後、ジューパン姿で掃除をはじめ、磨けるものはすべて磨きあげ、一段落すると市場へ少しもおいしく安いものをとくり出

し、夕方になると美しく着替えて皆の帰りを待つという風だった。もつともまとめて(一、二週間分)買物をし、余つた時間を自分の趣味にまわしていたが、室内装飾に興味を持っている人が比較的多く、一人で家中の壁を塗るかえたというエネルギッシュな人もいた。

八月、出産の折、過ごした産科病院での約二十日間も働く婦人を見るよき機会であった。眺望のよい部屋で世話は皆してもらえし、据え膳だし、私はただ赤ん坊の手足を眺め自然の摂理のすばらしさに恍惚としていればよかった。看護婦さんはこまめに働き、よく世話をして下さった。てきぱき仕事を処理しながらも患者にはどんな時にも変らずやさしく、さわやかに、淡々と対しており、見事だった。発刺として気さくで気がよく、人のことを穿さくしない爽快なアメリカ婦人の印象はなんとも魅力あるものだったが、もう少し深く立ち入るにはあと二、三年滞在しなくてはならないと思った。

それから退院一ヵ月後帰国、すぐ復職した時はてんで舞の連続であったが、今ごろやつと落ち着き、アメリカみやげとなった息子の顔など見ている。

(女子中高教諭・美術)